

1

1 I ウ
II イ
III ア
2 X エ
Y ウ
Z ア

3 I 成果主義
II 貢献心

4 I 「興
II 常に
5 人並み以上

6 (記述題)
7 ウ
8 イ
9 A ア
B エ
C イ

10 a 台頭
b 競争
c 分別

2

1 a 約束
b 練習
c 便器

2 A 用心
B 不安
C 安全

3 マリ(ちゃん)
4 マリ
たい

5 エ
6 イ
7 エ
8 I ソ
II ジ

9 ガソ
10 (記述題)
11 ア

1

6 脳が急速に発達する赤ちゃんのころに
お母さんがたくさん声をかけられるよ
うにしたほうがよいから。
(同意可)

2

10 お父さんは全く心配もしていな
いと思っただのにな遅かった
ことを言
つてきたから。
心配するようにな
(同意可)

配点	
1 9・10 2 1・2	各2点×12=24点
1 6 2 10	各6点×2=12点
その他	各4点×16=64点
100点	

1

- 1 Iは直前の「太古の昔」と、直後の「現代社会」を並列させているので「また」が入る。IIは直前で「本能に反する言動に出る人」がいることを認めたくえで、筆者が言いたいことを述べるための「しかし」が入る。IIIは直前の内容をまとめる「つまり」が入る。
- 2 わかりやすいところから入れるとよいだろう。Yの「知りたい」は「教育(学校)」と結びつけられる。同じ目的を持った仲間で作られているのが「会社」だと考えるとZが会社となり、Xの「生きたい」については「家庭」が入るとわかる。Iの「食事」は現代になる前からある。
- 3 Iについては、まず「利己的なスタンス」が「自分さえよければいい」「他人なんてどうでもいい」という考え方であることをつかんだ上で、次の段落を読めば、「成果主義」によってそれが助長されて増えているということがわかるだろう。IIについては、さらに次の段落で対照的な気持ちである「貢献心」が提示されている。「利己的なスタンス」に否定的な立場である筆者が提案したものが「貢献心」であることをつかもう。
- 4 『『知りたい』という本能』についてくわしく書かれているのはこれ以降であるから、答えについてもこの後にあることは見当をつけておくべきだろう。――線の七行後に『『知りたい』という脳の本能を磨くには』とあることに注目する。ここが一つの目の答えである。さらにこの直後の段落に「また」ともう一つの具体的な行動が書かれており、それらをまとめて段落の最後に「常に新しいことを知ろうと、前向きに耳を傾ける姿勢をもつことが大切なのです」と書かれている。
- 5 指示語が指している人ではなく、「対照的な人」を答えることに注意すること。指している人は直前の「何にでもすぐ興味をもって、首をつつ込みたがる人」であるので、これの対照的な人をイメージした上で答えを探そう。
- 6 直接的には二行前の「脳が急速に発達する時期に、赤ちゃんとお母さんが離れるのはできるだけ避けたほうがよいからです」が理由と言えるが、これだけだとなぜ「避けたほうがよい」のかがわかりにくいので、さらにその前の「お母さんがたくさん声をかけることが非常に重要」であることを説明に加えたい。
- 7 同じ段落の内容を根拠にして、ウを選ぶ。ア・イ・エは周辺のことばを使いながらそれらしいことを述べているだけで、本文中にならぬことをふくんでいる。
- 8 アは「すべての人間」が間違いである。「本能に反する言動に出る人も、少なからずいます」とあった。ウは「見ると理解できる」ことを「理由」にしてしまっているのがおかしい。そこに因果関係はない。エは一般論としてはおかしくもないが、筆者の論にはない。
- 9 基本的な慣用句である。ちなみにウは「首の皮一枚」、オは「首をひねる」の意味である。
- 10 a「台頭」は「勢いを増していく」という意味。bは「競走」と書かないように注意しよう。「競争」は走ることを伴わない。また「競」の下の部分のはねかたは左右で異なるので意識しよう。c「分別」は「道理をわきまえていること」という意味。「種類によって分けること」の意味では「ぶんべつ」と読む。

2

- 1 a「約」・b「練」の「いとへん」を続け字にしないこと。そこに気をつけておけばあまり問題はないだろう。c「器」では「口」を四つ書くことになるが、これも雑に書いて続け字にしまうと×になる可能性があるので気をつけよう。
- 2 そのままあてはめられるわけではないが、それぞれ類義語としては標準的なものでよく出てくる。Cについて「安然」などとしてしまった場合は正しい熟語をしつかり覚えておこう。
- 3 この文だけを読んで、「ユミコのお母さん」と思い込んではいけない。冒頭の場面の説明がないので戸惑うが、ユミコは今マリちゃんの家遊びに来ているのであり、マリちゃんはユミコとの遊ぶ約束を忘れてミドリちゃんの家に行ってしまったのである。しかし(その後本屋で立ち読みをしていたことにより)帰りが遅いため、マリちゃんのお母さんがそれを心配していたのである。
- 4 四行前に「わたしがこのうちの子供になってあげる」とあり、四行後に「もしマリちゃんが帰ってこなければ、ほんとうに自分がこの家の子になれるような気がした」とある。これらを指定の字数で表したのが、お母さんを見た後の場面に出てくる「マリちゃんのうちの子になりたい」である。
- 5 直前の二行から続いてこの――線③につながっている。自分との約束をすっかり忘れてしまったく思い出してもいないマリちゃんのこととがわかったために悲しくなると考えられる。
- 6 「もつと悲しくなつたけれど」と直前にあるので、アとエは外せる。「マリちゃんが無事に見つかった」とユミコが思っているそぶりはないので、ウの前半は根拠がない。
- 7 「不適當なもの」を選ぶことに注意すること。ア・ウは同じ段落で並列されていることである。エは「家族が心配すると思った」というのがおかしい。ユミコは「だれも心配する人なんかいない」と思っている。
- 8 ここでのユミコの予想がその通りになったのが帰宅後の様子でわかる。空欄前後の「茶色い小さな」や「を着て」などにも注目をしてほしい。
- 9 線部の他には、文章の冒頭で「やさしかったころのお父さん」ともあったが、これらのことからユミコの家は「お父さん」に起きた「変化」が原因で現在の状態になったことが推測される。変化した父を比喻で表したのが「ガソリンの切れたお父さん」である。
- 10 驚きの理由は「(思っていたこと)に(予想外の事実)から」という形で書くのが基本である。「遅かったな、どうした」という言葉に対してどうして驚くのか。「心配する人なんていない」と思っていたのである。
- 11 「明らかに不適當なもの」を選ぶことに注意すること。お父さんが「遅かったな、どうした」と言ってきた、それに驚いたのだから、アはおかしいと言える。エは微妙だが、「明らかに不適當」とまでは言えないだろう。

以上